

## 職場の民主化部会

村田紀代美

### コロナ禍の中、必要なのは民主主義

子どものいない学校で

今年、満開の桜の下の校庭に子どもたちが遊ぶ歓声は無かった。春の陽光を浴びた校舎が砂上の楼閣のように静かに屹立し、そのことだけが辛うじて「学校」であることを誇示していた。数名の教職員以外に人影は無く、子どもたちとも地域とも分断されたその場所は、全くの無力に見えた。

子どもたちに対面して直接語りかけて教えることができない状況に置かれ、休校中に何をするか、何ができるのかが問われていた。「主体的で対話的な深い学び」はひとまず脇に置かれ、教員たちは「今、学ばせたいこと」を伝えるために知恵を絞った。しだいに教職員間で「学校とは?」「教育とは?」「学ぶとは?」と語り合う姿が見られるようになった。

休校継続の中で

自宅勤務の経験は教職員を目覚めさせた。これまでいかに働きすぎだったのか。時間に追われ、体を酷使していたか。自分で考える時間を奪われていたこと。加えて、学校再開に向けた取り組みの中で、国・都・市と下りてくる指針と学校現場の要求との乖離、対応の遅れや現場任せの多さに不満や怒りが膨らんでいった。その時には他校の様子や働き方に関する情報をいち早く共有することが有効であり、行動に勇気を与えた。「現場の声を聴いて欲しい、見て欲しい」そうした声は武蔵野地区協会の武蔵野市教育委員会要請に反映させた。一方で文科省が出したのは「変形労働時間制」推進の法律改定案。命より管理体制強化を重視する国であることが露わになった。

学校再開後

クラスを二分して一日おきの午前授業。分散登校では、子ども一人ひとりの尊厳を守り、落ち着いた生活や学びの質をも変えるほど充実した学習をすすめられる少人数学級指導の良さを多くの教員が味わった。しかし通常授業再開後は「授業時数」優先による長時間授業や土曜授業が子どもたちにも疲労感をもたらしている。

「ウィズコロナの時代」と言われている現状だが、コロナ以前の状態になし崩し的に揺れ戻されている。人の命第一の学校・社会となるよう「民主主義」という手法を使って声を上げ、職場の要求を一つ一つ実現させていきたい。

(武蔵野・第五小)

※正式名称：東京都教職員組合北多摩東支部武蔵野地区協議会。

地区協とは、多摩地域の市や町や村の東京都教職員組合の組合員で組織されている協議会。それぞれの市や町や村の当局と対応した交渉団体でもある。